

【技術紹介 3】

配合飼料ゼロ給与酪農への挑戦

(サイレージの品質アップと集約放牧で達成した高収益経営)

北海道河西郡中札内村

酪農家 三浦 祐希拓 氏

「配合飼料ゼロ給与酪農への挑戦」

(サイレージの品質アップと集約放牧で
達成した高収益経営)

「飼料増産シンポジウム」(於 農林水産省)
三浦祐希拓(三浦牧場@十勝管内中札内村)
平成25年10月21日

三浦牧場の概要

- 十勝管内中札内村
- 労働力：家族人員主体
- 頭数規模：経産牛140頭 育成牛90頭
- 生産乳量：出荷乳量 950 t
- 飼養技術：個体乳量8,000kg
(平成25年8月現在)
- 経緯：父の政信が、1997年に空港建設に伴い
オホーツク管内紋別市から十勝管内中札内村
に移転

牧場経営の特徴

- ◆ かつてはアメリカ型の高泌乳を追求。ニュージーランドに視察に行き、その飼養体系に魅了された。
- ◆ 低投入酪農、放牧による乳牛主体の飼養を目指す。
- ◆ 放牧飼養と粗飼料中心の給与で、濃厚飼料の給与はゼロ
- ◆ 2006年の4月から集約放牧を開始、2008年には濃厚飼料の給与をゼロ

- ◆ 飼養方法：
 - 搾乳牛にはサイレージの通年給与
 - 不足しがちなエネルギーとして、地元の食品工場から副産物（枝豆殻、ニンジン、コーンなどの残さ）
- ◆ 乾乳牛は乾草とロールサイレージを給与

土地・施設・機械の所有状況

| | | | |
|---------|-------------------|---------------|-------------|
| 土地 | 放牧地 | 22ha | |
| | 採草地 | 54ha | |
| | 施設 | 3 ha | |
| 施設 | ミルキングパーラー | パラレル 10頭w | |
| | フリーストール牛舎 | 搾乳用 | 120床 |
| | | 乾乳用 | 40床 |
| | | 育成用 | 20床 |
| | | 分娩房 | 7床 |
| | フリーバーン牛舎 | 育成用 | 189坪 |
| | | 哺乳用 | 55坪（ロボット設置） |
| | カーフハッチ | 24基 | |
| | 堆肥舎 | 128坪×2、192坪×1 | |
| | 堆肥盤 | 77.5坪、42坪 | |
| | 尿溜 | 200トン | |
| | 倉庫 | 180坪 | |
| 乾草庫 | 160坪 | | |
| バンカーサイロ | 300トン×4基 250トン×1基 | | |
| 機械 | トラクター | 5台 | |
| | タイヤショベル | 4台 | |
| | トラック | 1台 | |
| | ダンプ | 3台 | |

飼養方法

| | | |
|------|-----|---|
| 飼養方法 | 搾乳牛 | 通年サイレージ給与 |
| | | エコフィード活用（ニンジン、枝豆の皮、コーン残さ） |
| | 乾乳牛 | 乾草とロールパックサイレージ |
| | 育成牛 | （大）乾草またはロールパックサイレージ （小）乾草またはロールパックサイレージと濃厚飼料 |
| | 放牧地 | 牧区 搾乳用9牧区（2ha×9） 育成用パドック2ha 乾乳用パドック1ha |
| | | チモシー採草地を追播機でペレニアルライグラスと 白クローバーに置き換える |
| | | 平成20年はメドフェスクを追播 |
| | 採草地 | 乾草または、ロールパックにて収穫 |

放牧に至る経緯

- ◆ 1997年 中札内村に営農開始
長期間、経営状況は不良
- ◆ 2003年 25歳の時に椎間板ヘルニアの手術
- ◆ 2004年 股関節の状態が悪化
- ◆ 2005年 いよいよ経営状況が息詰まる（累積赤字）
- ◆ 2005年12月 現状を根本的に変えようと決心
- ◆ 2006年4月 放牧へ転換
- 8月 股関節手術、腫瘍が見つかる。
酪農家の親友が逝去（絶望感）
- 9月 良性の判定。生きているのだからやりたいうように精一杯やってみようと思う
- ◆ 2006年12月 放牧初年度で、年末決算で経営が上向く
- ◆ 2008年12月 濃厚飼料ゼロの影響で経営悪化
- ◆ 2009年 牛を信じて、濃厚飼料ゼロを継続、草地改良の開始

草地改良に至るまで

- ◆ 中札内村はコントラクターが古くから整備された地域。何から何まですべてやってくれる
- ◆ 自分で採草地に入るのは肥料を捲くときぐらい
- ◆ 牧草地の状態を知らなかった
- ◆ 放牧を始めてペレニアルライグラスを捲いてみた
- ◆ 放牧中は乳量が出る、やめると減る
- ◆ 放牧で少し時間ができたので、牧草を自分で収穫
- ◆ 収穫であまりの酷さに驚く（経営の悪さの原因だった）
- ◆ 本腰を入れて草地改良に取り組む
- ◆ 現在、アルファルファ、オーチャード、混播草地 36ha
ガレガ、チモシー、混播草地 8ha
- ◆ 未改良 10ha

放牧酪農の意義

- 搾乳牛対象に9牧区、5月から10月まで18haの放牧地
- 1牧区当たり2haで集約放牧を実施
- 育成用と乾乳用のパドックを合わせて放牧地は22ha
- 面積が狭いので掃除刈りもせず。牛に任せた管理をしている
- 2000年に牛舎横に2haのパドックを設置
- 牛が毎日活発にパドックを歩き回る
- 季節を通じて、晴れた日は牛たちは率先してパドックに出たがる。少しずつ放牧地を増やしていった

放牧酪農へのプロセス

- 放牧地の1年目と2年目に掃除刈りを実施
- 化学肥料と農薬は1年目から一切使用していなかったが、5年目から最低限の肥料、農薬の使用へ
- 1年目は放牧地での家畜ふん尿の分解が進まず、乳牛は糞の周りの草を食べることはなかった
- 2年目以降はふん尿が次第に分解し、採食するようになった

放牧の経営効果

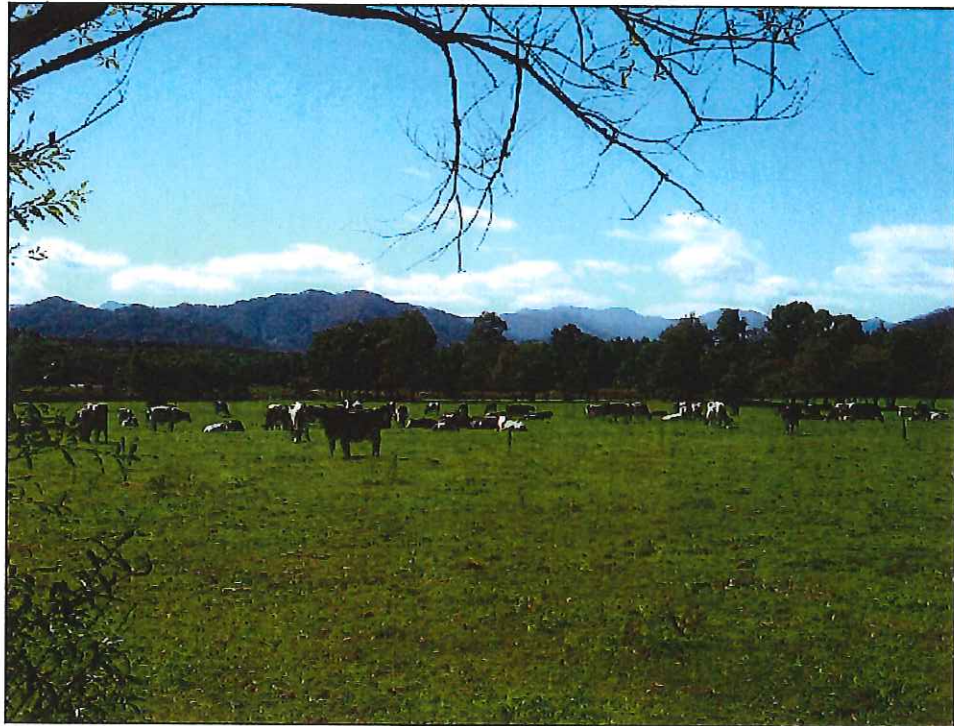
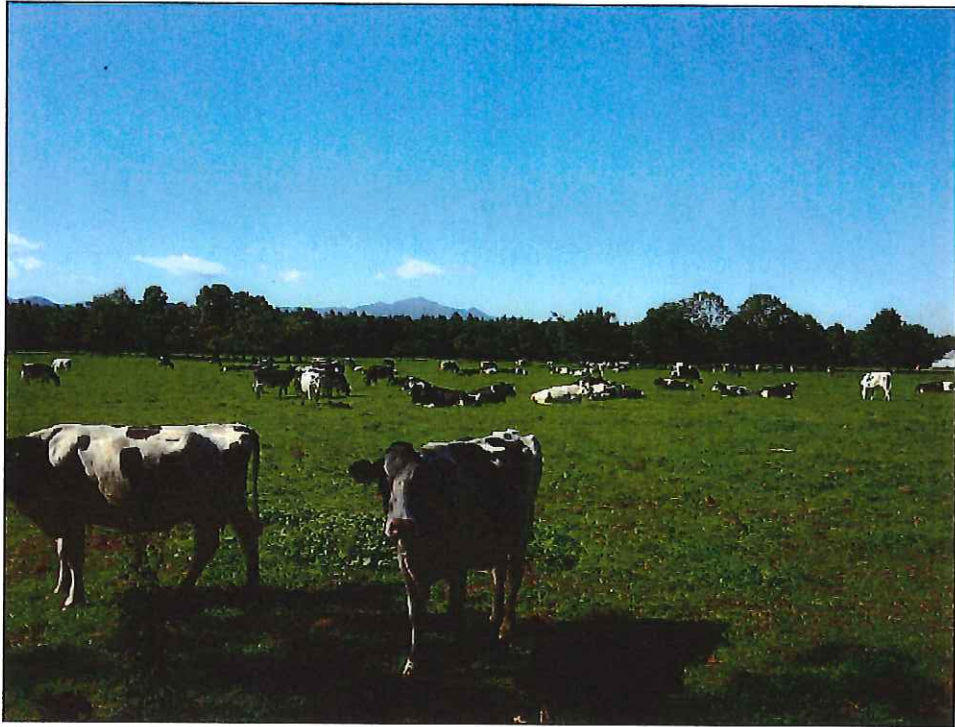
- 放牧地の土壌にはミミズが溢れて、豊沃な土壌に変貌
- 放牧による土壌改善
- 個体乳量を低位に抑える
- 乳牛の長命連産、事故率の低下

今後の課題

- ①全ての草地の更新
- ②土壌改良
- ③更新した牧草地の長命化
- ④牛の改良
(牧草給与主体とした牛群へ)
- ⑤エコフィードの安定的な給与体系の
確立
- ⑥負債の償還

エコフィードへの所感

- ①使いやすいものは、すでに使われている
- ②使いやすい、使われていないものも、排出者がお金を
取れると思うと、年々値段を上げて使いつらくなる
- ③使いづらいものは、酪農家側が大変
 - ・年から年中少しずつ出て来て時間を取られる
 - ・腐りやすい
 - ・水分が多過ぎるもの
 - ・金属ゴミの混入
 - ・腐廃物の混入
- ④使いこなせばメリットがある？メリットを出す努力が
必要。





「デーリィマン2012年3月『らくのう一家の生活』から」